



ミラドル展望台から望むトレド全景 左・大聖堂、右・アルカサル、
(Adobe Stock より)

スペインにもナポリや日光と同じように「トレドを見ずしてスペインを語るなかれ」という諺がある。

スペインの天然の城塞・古都トレドは、首都マドリッドから約 70 km 離れた南方に位置し、三方をタホ川に囲まれた河畔から街の中心である高台まで街ぐるみ世界遺産に登録されている。城内の手に触れられる壁や建物、足元の地面に至るまでキリスト教、イスラム教、ユダヤ教など宗教的に複雑な歴史の変遷が沁み込んでいる。コルドバと同じローマ帝国が開いた街であると言われるが、実際には歴史は更に古く起源は紀元前 192 年にまで遡る。西暦 560 年には西ゴート王国の首都となり宗教会議でカトリックを国教と決定した。難攻不落の城塞都市だったが、711 年イスラム教徒によって王国



スペイン・カトリックの総本山・大聖堂
(Adobe Stock より)

はあっさり滅亡した。幸い征服者イスラム教徒は異文化と信仰の自由に寛容だった。そのためカトリック教徒は自らの信じるまま改宗せずにカトリックを信仰し続けることができた。

コロンブスのアメリカ大陸発見によって大航海時代が始まった 15 世紀後半に、トレドの大聖堂は 270 年の歳月を費やして漸くスペイン・カトリックの総本山として完成した。大聖堂は壮大なゴシック建築で、中央礼拝堂を中心に 22 もの礼拝堂がある。異民族、異教徒の出入りが激しかったにも関わらず、街は繁栄し、多くの人々が出入りしていた。長きに亘って政治、経済、文化の重要な拠点であったが、1561 年マドリッドが首都となると政治の中核としての役割を終えた。



坂が曲がりくねった城内の道路 (Adobe Stock より)

政治、経済、文化の重要な拠点であったが、1561 年マドリッドが首都となると政治の中核としての役割を終えた。

トレドの門からバスが旧城内へ入ること

は出来ない。

城内では観光客は端から端まで歩いて見学することになる。坂道が多く、通路脇は民家がぎっしり詰まり、もし敵が城内に侵入しても、馬がスピードを上げれば壁に衝突するよう道路は狭く、短く巧妙に設計されている。歩いている



タホ川越しに展望するアルカサル (iStock より)



カトリック信者の多い城内を歩く近藤 (右から 2 人目)



狭い市内を観光トロロコが走っている。(no+e より)

街の人々もクリスチャンらしい人が多く、一説には「16 世紀で歩みを止めた町」とも呼ばれていて、街の中には今や廃墟となった建物が目に付くが、それは 20 世紀になって都市条例により容易に改築ができなくなったからでもある。城内には壁、道路面、店舗、狭い空き地など、街並みと往時の雰囲気はそのまま今日にまで残され、厳めしい外観と人々が商いをして日常を営む暮らしの空気や臭いがそのまま伝えられている。城内からは厳めしい城壁によって外の景色が眺められないため、城内に入ったら出るまで 16 世紀の世界に埋没することになる。

この台地上のトレド城内には、2 つの大きな建物が屹立している。それは、前記カトリックの本尊である大聖堂とユダヤ教のアルカサル (王宮・ユダヤ教の礼拝所) である。アルカサルは、ローマ帝国時代から城塞として使われ、常に戦いの場となった。時代的には珍しく四角い建物の四隅に塔を備えている。1936 年のスペイン内戦でフランコ將軍の守備隊が、一時アルカサルに籠城したこともあった。現在では市民戦争博物館として使用されている。いずれもタホ川を超えたミラドル展望丘から眺める城全体と中の 2 つの建物が、見事な存在感を示している。

外敵の侵入に備えてローマ時代から橋は 2 つ、町へ入る道も 2 本しかなかったことから防備に力を注いでいたことが分かる。しみじみと中世の歴史と雰囲気に浸らせてくれる愛らしい古都である。
(エッセイスト 近藤 節夫)